

報告Ⅴ：「大谷探検隊のエルデニ・ゾー寺院調査」

報告者：村岡 倫（龍谷大学文学部教授）

入澤： 引き続きまして、今度はがらりと様相が変わります。歴史学の方から、遺跡研究の立場から、村岡先生にモンゴルのエルデニ・ゾーについてご発表をいただきます。よろしくお願いいたします。

村岡： 村岡でございます。私は歴史学が専門ですので、そちらの方から大谷探検隊の記録の意義ということをお話ししたいと思います。

エルデニ・ゾー寺院というのは、モンゴル最古のチベット仏教寺院でありまして、13・14世紀にユーラシア全域を支配しましたモンゴル帝国の旧都カラコルムの地に、帝国滅亡後の16世紀の末に建てられ、今もモンゴルの人々の信仰を集めております。エルデニはモンゴル語で宝、ゾーは寺院ですので、「エルデニ・ゾー寺院」と言うと、「ゾー」と「寺院」が重なって、変な言い方ではありますが、一応分かりやすくそう呼ばせてもらいます。

モンゴルは、クビライ・カアンの時代、13世紀半ばに中国を支配して元朝をたて、隆盛を極めました。14世紀後半には明朝に敗れ、モンゴルに退き衰退してしまいます。しかし、16世紀、クビライの子孫に当たりますダヤン・カアンの時代になると復興して、明朝ともかなり渡り合うようになりました。ご存知の方も多いかと思いますが、現在の我々が見ることのできる万里の長城は、決して秦の始皇帝が造ったものそのものではなくて、このダヤン・カアン以後、再び始まった遊牧民たちの攻勢から領土を防御するために、明朝が造ったものなのです。

一方、このダヤン・カアン以降、モンゴルはいくつかの勢力に分裂し、あちこちで、カアンが乱立するという状況が起こりました。本来カアンというのは中国の皇帝と同じで、唯一の存在であるべきですが、ダヤン・カアンの子孫が何人もカアンを称するわけです。その中の1人、今の内モンゴルを勢力圏としていました、ダヤン・カアンの孫に当たるアルタン・カアンが、1578年にチベット仏教の高僧ソナムギャツォと会見し、彼にダライ・ラマの称号を与えました。現在に至るダライ・ラマ制度の始まりです。その代わり、アルタンは彼の仏教界での権威によって、他のカアンより優位に立つための裏付けを得るという方策をとったのです。これに対抗して、アルタンの従兄弟の子、アバタイ・カアンという人物も、チベット仏教によって自らを権威付けるために、1585年にこのエルデニ・ゾー寺院を建設し、高僧を招くということをしました。エルデニ・ゾーは、その後長くモンゴル人達の仏教信仰の中心になって、大変栄え

た時期もあったのですが、1938 年の革命政府の弾圧によって寺院内の多くの建物が破壊されてしまいました。

1990 年代、モンゴルの自由化に伴って、チベット仏教も復興しましたが、エルデニ・ゾーはモンゴル最古のチベット仏教寺院ということで、再び重要視され、国外からも大変注目を浴び、その歴史についていろんな研究や著作が出るようになりました。20 世紀初頭の記述では、当時、寺院を調査したロシアの探検家の記録に基づくところがほとんどでしたが、彼らの記録は、寺院内の建造物や碑文のことについては詳しいのですが、その他の寺院内の様子などを具体的にはあまり書いていません。

そんな中、同じ頃、大谷探検隊の第 2 次探検で橘瑞超・野村栄三郎の 2 人も、このエルデニ・ゾーを訪れているのです。そして、2 人とも詳細な日記を残しています。橘の日記は『使命記』、野村の日記は『蒙古新疆旅行日記』と言いますが、これには、ロシア隊の記録にはない記述がたくさん残っているのです。大谷探検隊がエルデニ・ゾーを訪れているなんてことは、モンゴルでもロシアでもあまり認識されていなくて、彼らの記録をそういう著作や研究に活かされるということは、今まで全くと言って良いほどありませんでした。そこで私は、今回、この第 2 次大谷探検隊の橘・野村の日記から、エルデニ・ゾー寺院について、どのようなことが分かるのかということを、3 点にわたってお話ししようと思っております。



これは現在のエルデニ・ゾーを上空から撮影したのですが、橘・野村の記録では、寺院は正方形の城壁で囲まれていて、四面に門が一つずつ設けられていること、城壁の上に、白色の小塔が 100 あまりあること、実際は 108 あるのですが、それらが極めて秩序正しく配置されていて壮麗であること、現在も見られるそのままの形状を実に正確に述べています。大谷探検隊一行は、「南門」から入ったといい

ます（写真、左端に見える門）。これは、橘の日記にありますエルデニ・ゾーの図面（次頁の図）ですが、この図では B・C 地点の門です。これは、現在おもに「東門」と呼ばれている門なので、たいへんややこしいのですが…。正確な方角で言えば、東南の門なので、「東門」と言ったり「南門」と言ったりすることが起こるようです。橘は四つの門のうち、彼らが入城した門が一番大きく、

正門であるとしています。今では、その東南の門は閉ざされ、橋が「西門」と言う門、現在は普通「南門」と呼ばれる西南の門が正門のような役割を果たしています。図の右側 E の門です。だいたい観光客もこの門から入ります。駐車場もその門の前にありますので。

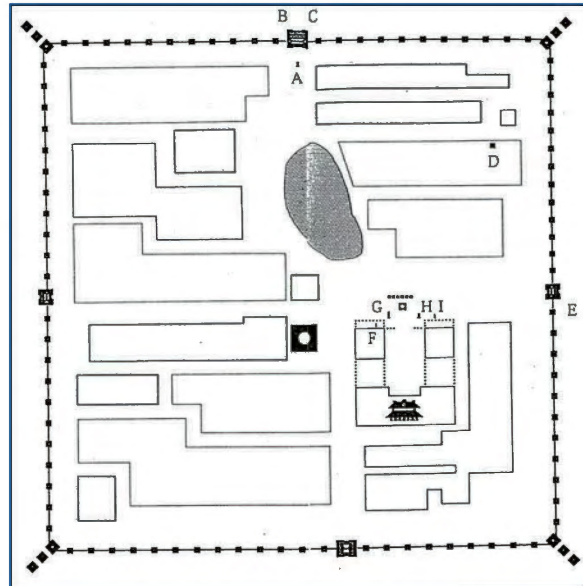
城内には、緑色および赤色の屋根を持つ殿堂があることなどが述べられていますが、この殿堂というのが、エルデニ・ゾー内に現存しますゴルバン・ゾーで、「三つの寺」と

いう意味ですが、それは西寺・中寺・東寺の三つがあるからそう呼ばれていて、実際に今もその屋根は緑や赤の色鮮やかな色を残しています。

橋は、その殿堂を中心に、ラマ達の住居が建っていて、その他にも、廟堂や家屋が数多くあって、細く狭い道路でありながら、秩序ある街並みをつくっていることを書いています。実際、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけては、1500 人もの僧がいて、そのうち 500 人ぐらひは寺院にいつも住んでいたので、寺院内には数多くの僧房があったということです。19 世紀末にエルデニ・ゾーを調査したロシアのラドロフの写真を見ても、多くの建物があるのが分かりますが、橋の日記では、寺院内が一つの街のようになっていた様子がさらに詳細に分かるということです。図の□の部分建物ですから、寺院内がほとんど建物で埋め尽くされているのが分かると思います。しかし、残念ながら、先ほども申し上げましたように、彼らが訪れてから 30 年度、1938 年の破壊によってほとんどの建物は破壊され、現在は残っておりません。先ほどの上空からの写真を見ても分かる通りです。

到着した彼らには、宿舎が割り当てられるのですが、それは、入った門を左折した新築中の大きな家屋で、図の D の地点にあったということです。かなり大きな、ちゃんとした建物であったようですが、橋が書いているのをよく読みますと、それは、モンゴルの移動式住居であるモンゴル語ではゲル、中国語でパオという、何かの映像か写真等で見られたことがあるという方もおられると思うのですが、何かそういう形をした建物のように読み取れます。室内が暗いとも言っており、彼らが来たのは 8 月ですから大変暑かったと思いますし、その暑さを凌ぐように、日が射し込まないような形になっていたのでしょう。

現在モンゴルの風光明媚な草原には、ゲルを立ち並べたツーリストキャンプがあって、観光客が宿泊できるようになっているところがあるのですが、その



場合のゲルは、形はそうなのですが、固定式になっています。橘・野村が寝泊まりした建物は、そんなツーリストキャンプのゲルを連想させます。そうすると、このエルデニ・ゾー内には、先ほど言った僧侶が住む僧房以外に、そういう旅行者を泊めるような場所まであったということが分かります。ロシア隊はこんなことは何も書いていなくて、これは、橘や野村2人の記録で、初めて分かることなのです。大変興味深いところだと思います。もちろん、橘・野村も僧侶でした。ロシア隊とは違って、ただの旅行者ではありませんので、宿泊する資格があったということなのかもしれません。

更に、彼らは、正門から右折したところに建設中の建物があるということも書いています。要するに、1908年に彼らがエルデニ・ゾーを訪れた時点でも、まだ建物が新築されているような、当時のエルデニ・ゾーの賑わいと言いますか、そういうことが彼らの記録でよく分かり、それだけでも、エルデニ・ゾー研究にとって、彼らの記録がいかに重要なのかということが理解できるのではないのでしょうか。

さらに、彼らの記録で重要なのは碑文です。実はこのエルデニ・ゾー寺院には、モンゴル帝国時代の旧都カラコルムに関する碑文がたくさん残されていました。それは、16世紀末にエルデニ・ゾーが建てられた時点で、その北側には、14世紀後半に衰亡したモンゴル帝国の旧都カラコルムがすでに廃墟となっていたのですが、そこから石材を初めとする様々な資材を持ってきて再利用し、エルデニ・ゾーを造ったからでした。それで、このエルデニ・ゾーの中には、モンゴル帝国時代の注目すべき碑文がたくさん残っているというわけです。

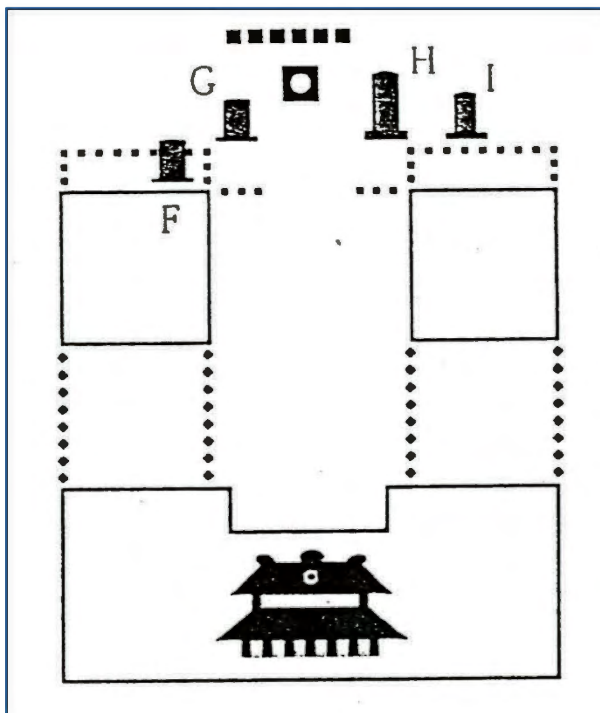
実はこれら碑文に関しましては、先ほどもお話ししたロシアなどの研究者がかなり克明に研究しておりまして、拓本の写真も載せられている著作もあります。先ほども申し上げましたラドロフというロシア人には、1892年に発刊された著作があって、それらの碑文がエルデニ・ゾーのどこにあったか書いてはいるのですが、その場所にあった建物自体がもう今はありませんので、それが今のどこに当たるのか全然分からなくなっています。ところが、橘・野村は、それぞれの碑文の位置をちゃんと図面に描いているのです。その点、後世の人間にとっては大変助かります。

まず、「和寧郡忠愍公廟碑」という碑ですが、「和寧郡」というのはカラコルムのことです。「忠愍公」というのは、モンゴル皇帝に近侍する宿衛の兵で、反乱鎮圧のためにカラコルムに派遣された人物で、彼の死後、その功績を顕彰するための廟を造った際に立てられたのがこの碑です。漢文で書かれています。この碑は、二つに割られ、先ほど話題にした橘・野村が「南門」と呼んだ門の両柱、BとCの場所にそれぞれ嵌め込まれていたと彼らは記しています。

1996年のことですが、大阪大学の森安孝夫先生を代表としてビチュース・ブ

ロジェクト（ビチュースはモンゴル語で碑文という意味）という日本・モンゴルの共同調査プロジェクトが始まりました。私もそのメンバーであり、プロジェクトの中でエルデニ・ゾーの碑文も長年調査してきました。2004 年以降は、大阪国際大学の松田孝一先生を代表とし、モンゴル時代に特化してそのプロジェクトは今も継続しております。その調査の折、10 年以上も前の調査になりますが、その時には、この碑は橘・野村の記述通り、B と C の所にまだ嵌め込まれたままでした。しかし、重要な碑文ということで、後に外され保管されることになって、今は代わりに別の石が嵌め込まれています。現在、この碑文はどうなったかと言いますと、今年の 6 月に、エルデニ・ゾーの近くにカラコルム博物館というのができまして、ここに収蔵されております。ところが、残念ながら「和寧郡忠愍公廟碑」は展示されずに、収蔵庫に眠ってしまっています。

次に「剏建三靈侯廟記」という碑です。中国では、北宋時代の 11 世紀から、周代の 3 人の諫官、唐宏・葛雍・周斌を靈驗あらたかな神として祀る廟制があったのですが、それに基づいて、元になってからもカラコルムに廟を築いていて、それを記念する碑です。1339 年に立石されました。これは図の A の地点にあったと橘・野村は書いています。これは現在も同じ場所にそのまま立っています。後世、碑面にガリック文字でオンマニパドメフウンと彫られたものですが、残念ながら、漢文で書かれた題名の部分が見えにくく、橘・野村は題名を間違えて記しております。もっとも、彼らはガリック文字を「蒙文」としており、その認識も誤ってはいますが。彼らは題名を「三靈／廟山」と記していますが、ガリック文字の間からよく見ると、正しくは「三靈侯／廟之記」です。



また、橘は、その立石を「至元己卯（1339）仲夏吉日」と正しく読み取っているのですが、野村は、その日記の図に、「至正己卯仲夏吉日」と誤って記しています。彼らはこの碑の拓本を数枚採っており、『使命記』にはそのうちの一枚の写真が載せられているのですが、それらの拓本がその後どうなったのか、残念ながらその行方は分かっていません。

更に、先ほど申し上げましたゴルバン・ゾーと呼ばれる寺院の前に、F・G・H・I と 4 つの碑文が立てられていることが、橘の図に示されています（左に拡大図）。

こちらの方も、「三霊侯廟碑」と同様、拓本を採ろうとしたらしいのですが、ラマ達、つまりお坊さん達に拒否されました。これらの碑文のサイズだけは記しているのですが、残念ながら不正確です。ラマ達に拒否されたこともあって、慌てて測ったのでしょうか。しかし、不正確ながらもそのサイズから、現存する碑文のうち、一体それぞれが何に当たるのかということは大体分かってきます。

私の推測ではありますが、アルファベット順の反対、I・H・G・F の順で、これらに当たるであろうと思われる碑文を紹介しておきます。まず I の碑文ですが、実はこれはペルシア語碑文です。ハーンカーというイスラム教徒の修行道場兼宿泊施設を建造した時の記念碑で、1341 年か 42 年の立石です。ソヨンボと呼ばれるチベット仏教の信仰の対象となっている文字の下にペルシア語の文字が見えます。後世、このペルシア語文を全く無視して、ソヨンボが彫られたのでしょ。そのソヨンボが長く参拝客の信仰の対象になっていましたが、現在はカラコルム博物館に収蔵され、「和寧郡忠愍公廟碑」とは違って堂々と展示されています。その横には、日本語訳、英訳が示されていますが、この翻訳には私も関わっており、ビチュース・プロジェクトの成果の一つと言えます。

次は H ですが、これは、橘・野村が訪れた時には、この I のペルシア語碑文の横に立っていたようです。しかし、おそらく、我々の調査の時には、寺院内の草むらの中にうち捨てられていた碑文で、「嶺北省右丞郎中総管収糧記」であ



ったと思われます。「嶺北省」とはモンゴル地域のことですが、中国方面からモンゴルに食糧を運んで蓄える制度を整えた際の記念碑です。1348 年に立石されています。これは 244 センチという割と大きな碑文なので、H はまずこれで間違いないと思います。現在、カラコルム博物館の前にこういうふうに立っております（左の写真）。この碑は右側に漢文が書かれてあって、左側はモンゴル文字が書かれてあります。漢文とモンゴル文字の両方が書かれているということもあって、カラコルム博物館のシンボリックなものとして、こうやって入り口の前に立てられているのでしょ。

更に、次は G ですが、これは現在

も同じ場所にある碑文と思われます。後世、チベット文字が大きく彫られているのですが、碑面全体が何か変に磨かれているようです。ひょっとしたら、これも、もともとはモンゴル時代の何か漢文の碑文であったのが、後に磨かれて、文字が消され、このチベット文字が彫られたということではなかったかと思います。真偽のほどは分かりませんが。

最後にFですが、これは「和林兵馬劉公去思碑」という碑であると推測しています。「和林」もカラコルムのことですが、その地の「兵馬」という役職にあった劉天錫という人物が、任期を終え、漢地に帰る際にその功績を記した碑として立てられたもので、1331年の立石です。この碑は、現在はここにはなくて、ビチュース・プロジェクトの調査時には、先ほど紹介しました「嶺北省右丞郎中総管収粮記」と並んで草むらに転がっていました。現在どこにあるかと言いますと、エルデニ・ゾー内のチベット様式のツォクチェンという大経堂前にある祠の中に入ってしまったようです。なぜか、カラコルム博物館に収蔵されませんでした。その上、なぜさらに祠に入れられているのか、あまりよく分かりません。モンゴル側の研究者に聞くとところによりますと、エルデニ・ゾー寺院自体も博物館の役割を果たしてはいるので、寺院内からカラコルム博物館に全てのものを持っていくと、それはそれでやはり支障があるということで、それで幾つか残し、そして幾つか持っていったのだろうということでした。いずれにしても、今や「和林兵馬劉公去思碑」の全貌を見ることができなくなっているのは残念です。以上のように、橘・野村の記録は、カラコルム関係の碑文が20世紀初頭にどこにどのようにあったのか、それを知る重要な記録でもあったのです。

最後に、もう一つ、橘・野村の記録が、エルデニ・ゾーの歴史的な意義を知る上で重要だということをお話したいと思います。彼らの記録によりますと、城の北門、彼らが入ってきた門と相對する門で、今は西門と呼ばれており、先の図では下側にある門ですが、この門の外に、中国の商人が滞留して、お店を構え、その家屋内に商品を陳列して客を待っていたというのです。商品はお茶やお菓子、砂糖、綿布、米、火を付ける燐寸、線香、嗅ぎ煙草と、旅行者が必要とするものが一通り揃うようになっていたようです。橘は、「この地は大集落であるので、絶えず中国商人がやってきて滞留する」と述べています。探検隊はこれによって旅行に必要な品を得ることができたのでした。

更にこの地を直轄するトシェート・ハンという王がいたのですが、彼から派遣された委員に要請して、彼らはこれ以降旅するのに必要な駱駝や馬を借用することができたということを述べています。実を言いますと、モンゴル帝国時代のカラコルムにも商業地区がありまして、特に有名なフランスの修道士で1250年代にこの地を訪れたルブルク（Guillaume de Rubrouck）という人物の記

録にも、そのことが克明に描かれているのです。モンゴル帝国時代も、このカラコルムで、旅行く人達がそういう商人からいろんな必需品を買って、中国へ、中央アジアへ向かったという記録が残っております。その意味では、カラコルムは帝国の首都というだけでなく、交通路、交易路の重要な拠点でもあったわけですね。

実はこの交通路については、かつて、中国で言えば唐代の時代、8、9 世紀、モンゴル帝国より更に 500 年以上遡る昔のことですが、オルドバリクというウイグル帝国時代の都がありまして、中国方面からやってきた使者が、そこを経由して、中央アジアへ向かうという道があったことが分かっております。オルドバリクはカラコルムの近くで、現在も「ハル・バルガス」、モンゴル語で「黒い城」という意味の遺跡が残っています。皆さんは、普通シルクロードと言うと、唐の都、長安から、まっすぐ西へ向かって中央アジアへ出るという経路を思い浮かべると思うのですが、実を言いますと、いったん北へ、まずはオルドバリクに向かい、そこを経由して、一転、今度は西南に進路を変え、中央アジアへ向かうという、そういうルートがあったことが分かっておりまして、かつて「回鶻路（かいこつろ）」というふうと呼ばれていた道があったのです。「回鶻」は「ウイグル」の音写です。

オルドバリクやカラコルムのあった地は、オルホン川流域で大変豊かな遊牧地で、古来より突厥時代から、ここを根拠地として遊牧国家が隆盛を極めることが多いのですが、旅行く人達にとってみれば、中国からまっすぐ西へ向かうより、オルホン平原を経由して、ここで遊牧民達から例えば運搬用の馬や駱駝を調達したり、いろんな必需品を購入したり、直接荷物を運んでもらったり、あるいは旅には危険がつきものですから、ボディガードを依頼したりして、中央アジアへ向かうというルートの方が実はより安全であったのです。

私は、このオルホン平原の都市、唐代のオルドバリク、モンゴル帝国時代のカラコルム、そして 20 世紀初頭のエルデニ・ゾー寺院は、時代を超えて、同じような機能を果たしていたと思っています。言ってみれば、エルデニ・ゾーは寺院ではあるんですけども、周りに集落を作る都市としても機能していたと言いますか、交通の拠点としての寺院と言いますか、そういうことが大変重要な役割としてあったのではないかと思います。これも橘・野村の記録によって初めて分かることなのです。初めにも申し上げましたロシアの探検隊もいろいろ記録は残しているのですが、残念ながら、そんなことは何も書いていませんので、いかに橘・野村の記録が克明であり、重要であるかということが分かっていただけではないかと思えます。

橘・野村は、エルデニ・ゾーだけでなく、もっと広範囲にモンゴルのことを記録しています。しかし、これまではそれがあまり注目されたことがなく、20 世紀初頭のモンゴル研究に彼らの記録が十分に活用されていない状況でありま

す。今後は彼らのモンゴル調査の全貌を明らかにし、それを十分に活用して、当時のモンゴルの状況を研究することが大きな課題ではないかと思います。

以上で終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

入澤： どうも村岡先生、ありがとうございました。